

第1学年 音楽科学習指導案

1. 題材名

和太鼓を通して、我が国の音楽のよさを知ろう。

教材：「三宅島太鼓」

2. 題材の目標

(1) 音楽科としての目標

○唱歌（しょうが）を用いて和太鼓の奏法を知り、楽しく演奏することができる。

○和太鼓を通して我が国の伝統的な音楽について、深く考えることができる。

(2) 汎用的スキル

○郷土芸能を知り、客観的、論理的に見つめ直し、考えることができる。（批判的思考力）

○合奏において、奏法を工夫してよりよい演奏になるように考えることができる。（協働する力）

○よりよい演奏にするために、範奏をよく観聴きして表現に活かすことができる。（感性・表現・創造の力）

(3) 態度・価値

○合奏において次の人へつなげたり、他者の良さを知ったりして、互いを尊重することができる。（他者に対する受容・共感・敬意）

○郷土芸能のあり方を、考えることができる。（よりよい社会への意識）

3. 生徒の実態

中学1年生は、小学校ですでに和楽器に触れている生徒が増えてきた。多いのが箏であり、鑑賞のほか、『さくらさくら』等を演奏した経験をもつ生徒もいる。和太鼓に関しても、初めて見たり叩いたりする生徒が減り、運動会での盆踊りで見聞きたり、地域の祭りや盆踊りで見聞きたりした経験をもつ。そのため、和楽器に対しての特別感や違和感は減っているように思える。歌うのは恥ずかしいが、和太鼓になると活き活きと活動する生徒も多く見られる。しかし、やはり本格的に腰をすえて和楽器に向き合う機会はまだ少ない上に、年間の大部分を占める音楽は西洋の奏法や音楽語法を下敷きにしたものが圧倒的に多い。和楽器の本質に迫るためにも、唱歌や郷土芸能のあり方などに触れ、「和楽器体験」に終止せず、幅広い指導をして深い学びに結び付けたい。

4. 題材について

①教科から見た特性

本教材は、東京都三宅島の神着郷土芸能保存会が牛頭天王祭で伝承している奏法のうち、打ち込み太鼓に基づく。長胴太鼓を地面に対して横向きに置き、楽器をはさんで2人の打ち手が向かい合って演奏する。一方の下打ちの一定のリズムにのせて、もう一方の上打ちは決められた旋律・リズムを演奏する。打つリズムや旋律、右手左手の奏法も難易度が高くなく、導入としては適した教材といえる。また、下打ち・上打ちともに、決められた回数で交代できる仕組みになっており、本題材ではまとめとして学級全員が一斉に演奏することで一体感が生まれている。

②汎用的スキルや態度・価値育成の観点からみた特性

学級全員で合奏する中で、自分の演奏がその一部となる。そのためには、他者の演奏を良く見て動く必要がある。また、他者の演奏を見ることで自分の演奏を振り返り、よりよく演奏できるよう工夫する。このようなことから、協働する力、感性・表現・創造の力、他者に対する受容・共感・敬意をはぐくむことに有効である。

また、振り返りでは我が国の郷土芸能のあり方について、現状を知った上で自分の意見をまとめる。具体的には三宅島太鼓の舞台化に伴う奏法や演出の変化、徳島県の郷土芸能である阿波踊りが全国で広まっており東京でも各地に阿波踊りの祭りがあること、よさこいソーランといった郷土芸能が複合的になり郷土を離れて新たな芸能となっていること、を説明する。以上から、批判的思考力、よりよい社会への意識をはぐくむことができると考える。

5. 題材計画と資質・能力を育成する主な手立て（全5時間 本時5／5時間）

	学習活動	関連する主な資質・能力	資質・能力を育成する主な手立て
第1次 (4.5時間)	・三宅島の地理や歴史、祭りについて知る。 ・三宅島太鼓の上打ち・下打ちを、唱歌を用いて合奏する。	○感性・表現・創造の力 ○協働する力 ○他者に対する受容・共感・敬意	○楽器や曲に対して、よりよくしようと思える場面の設定 ○自分の演奏に対して、よりよくしようと思える場面の設定 ○学級の合奏に対して、よりよくしようと思える場面の設定

第2次 (0.5時間)	・我が国の郷土芸能のあり方について、三宅島太鼓を切り口に様々な現状を知る。	○批判的思考力 ○よりよい社会への意識	○多様な視点を提示し、郷土芸能に対する考えを問う場面の設定 ○郷土芸能のあり方に対する考えを持つ場面の設定
----------------	---------------------------------------	----------------------------	--

6. 本時の学習指導

(1) 本時のねらい

- ・唱歌を用いて和太鼓の奏法を知り、楽しく演奏することができる。
- ・和太鼓を通して我が国の伝統的な音楽について、深く考えることができる。

(2) 本時の展開

時間	○学習活動 ・ 予想される生徒の反応	◇資質・能力を育成する主な手立て ◆評価
導入 5分	○上打ち・下打ちの唱歌と、左右の手を確認する。 [上打ち ツクドン ツクドン ツクドンドン…] [下打ち ドンコ ドンコ ドンコ…] ・難しい、忘れてしまった。 ・ドドッコ ドンドンのところにくるとどっちの手で叩けばいいかわからなくなる。	
展開1 20分	○上打ち・下打ちを打つ。 ・下打ちは単純なリズムだが、速度を安定させるのが難しい。 ・上打ちはどの箇所を叩いているのかわからなくなる。 ・どちらも、大きな音を出すにはどうすればよいか。 ○上打ち・下打ちを交代する。 ・次に入る人の待つ位置が違う。 ・入るタイミングを間違えると、ケガにつながる。 ・とぎれないように交代するにはどうすればよいか。 ○全員で合奏する。 ・前の人、後ろの人の動きを見て、とぎれずに演奏したい。 ・2台の太鼓でずれないように演奏したい。	◇範奏をして、口唱歌や左右の手の動き、身体全体の動きに注目させ、よりよい演奏を目指すように促す。(協働する力) ◇交代では前後の人との関係が大切であることを示すため、順番をいつも一定にしたり声を掛け合ったりさせる。(他者に対する受容・共感・敬意) ◆奏法に注意して楽しく演奏することができたか。【演奏】
展開2 20分	三宅島太鼓を通して、我が国の郷土芸能について考えよう。	
	○我が国の郷土芸能を知り、深く考える。 ・同じ三宅島太鼓でも、舞台化すると演出や奏法がちがう。 ・徳島県の阿波踊りは、東京でも各地で踊られている。 ・よさこいソーランは、「よさこい」は高知県、「ソーラン節」は北海道である。新しい形ができています。	◇客観的、論理的に、郷土芸能を見る視点を伝える。(批判的思考力) ◇現代の郷土芸能の形について、事例を基に深く考えさせる。(よりよい社会への意識)
結末 5分	○学んだことを書く。 ・唱歌を言って太鼓を叩くと、みんなで合わせやすく、気持ちもそろった。口に出さない時も心の中でずっと唱えるようにした。 ・型が決まると、良く響く音で太鼓が演奏できた。 ・昔から受け継がれていることをきっちり守ることと、それを更新していくことはどちらも大事だと思った。 ・舞台上で作品として演奏するときと、その土地の人が地元で演奏するのでは、目的が違ったり、環境によって鳴り響く音や伝わり方が変わってくると思う。	◆我が国の音楽のあり方について、自分の意見をもつことができたか。 【ワークシート】